



「黒島を忘れない」を読んで

百田尚樹さんの小説「永遠の〇」を読み、その後に放映された映画も観に行つた。ラストシーンに近付く前に、岡田准一が演じる宮部久蔵、がゼロ戦に乗つて沖縄に向かう時、これに追尾して飛行する飛行機にエンジントラブルが起きたのか、機体不良によつてゼロ戦に追尾できなくなつたシーンがあつた。もちろん、映画では、この飛行機を操縦していた新井浩文が演じる景浦介山が暴力団組長になり、宮部久蔵の孫に当たる三浦春馬が演じる佐伯健太郎を強く抱きしめるという感動的シーンがあるのだが、私は、墜落したであろう機体を操縦していた景浦介山がどうやって命を取り留めたのであらうかと思つていた。

特攻によって「未帰還」とされた日本兵の人数は4000人を超えると言われているが、その3分の1ほどが機体不良で帰投したが、不時着したか海没してしまい、残る3分の2ほども、そのほとんどが沖縄に向かう途中で敵戦隊に発見され撃墜され、沖縄海域までたどり着けた機体は少なかつたと「黒島を忘れない」の中で説明されている。

さて、「ゴールデンウイークを利用して、

田淮一が演じる宮部久蔵、がゼロ戦に乗つて沖縄に向かう時、これに追尾して飛行する飛行機にエンジントラブルが起きたのか、機体不良によつてゼロ戦に追尾できなくなつたシーンがあつた。もちろん、映画では、この飛行機を操縦していた新井浩文が演じる景浦介山が暴力団組長になり、宮部久蔵の孫に当たる三浦春馬が演じる佐伯健太郎を強く抱きしめるという感動的シーンがあるのだが、私は、墜落したであろう機体を操縦していた景浦介山がどうやって命を取り留めたのであらうかと思つていた。

特攻によって「未帰還」とされた日本兵の人数は4000人を超えると言われているが、その3分の1ほどが機体不良で帰投したが、不時着したか海没してしまい、残る3分の2ほども、そのほとんどが沖縄に向かう途中で敵戦隊に発見され撃墜され、沖縄海域までたどり着けた機体は少なかつたと「黒島を忘れない」の中で説明されている。

田淮一が演じる宮部久蔵、がゼロ戦に乗つて沖縄に向かう時、これに追尾して飛行する飛行機にエンジントラブルが起きたのか、機体不良によつてゼロ戦に追尾できなくなつたシーンがあつた。もちろん、映画では、この飛行機を操縦していた新井浩文が演じる景浦介山が暴力団組長になり、宮部久蔵の孫に当たる三浦春馬が演じる佐伯健太郎を強く抱きしめるという感動的シーンがあるのだが、私は、墜落したであろう機体を操縦していた景浦介山がどうやって命を取り留めたのであらうかと思つていた。

特攻によって「未帰還」とされた日本兵の人数は4000人を超えると言われているが、その3分の1ほどが機体不良で帰投したが、不時着したか海没してしまい、残る3分の2ほども、そのほとんどが沖縄に向かう途中で敵戦隊に発見され撃墜され、沖縄海域までたどり着けた機体は少なかつたと「黒島を忘れない」の中で説明されている。

黒島とは、薩摩半島の坊ノ岬からおよそ50キロほどのところにある島であり、竹島、硫黄島と黒島、それと無人の岩礁を合わせて鹿児島県鹿児島郡三島村となつてゐる。また、この硫黄島(以前は、喜界ヶ島と呼ばれていた)は、歴史が好きな人であれば記憶にあらうと思われるが、平家打倒の陰謀に加わり、その後これが露見したことから流罪となつた僧俊寛が配流されたのが、この喜界ヶ島であつた。また、お亡くなりになられた18代目中村勘三郎さんがこの地に赴き、大歌舞伎「俊寛」を演じた場所である。実際に俊寛がかつて住んでいた場所にて、その場の空

第2艦隊が徳山沖から連合艦隊としての最後の出撃をしたころ、数多くのゼロ戦が知覧などから飛び立つたが、そのころから、沖縄に向けた出撃機のルート上にあつた黒島に日本兵の遺体が流れ着くようになつたことから物語が始まる。

黒島とは、薩摩半島の坊ノ岬からおよそ50キロほどのところにある島であり、竹島、硫黄島と黒島、それと無人の岩礁を合わせて鹿児島県鹿児島郡三島村となつてゐる。また、この硫黄島(以前は、喜界ヶ島と呼ばれていた)は、歴史が好きな人であれば記憶にあらうと思われるが、平家打倒の陰謀に加わり、その後これが露見したことから流罪となつた僧俊寛が配流されたのが、この喜界ヶ島であつた。また、お亡くなりになられた18代目中村勘三郎さんがこの地に赴き、大歌舞伎「俊寛」を演じた場所である。実際に俊寛がかつて住んでいた場所にて、その場の空

以前から読みたいと思って購入していなかった小林広司さんが書いた「黒島を忘れない」というほぼノンフィクションの小説を読むことができた。

昭和20年3月26日に沖縄特攻作戦が発動され、翌4月6日に戦艦大和と第2艦隊が徳山沖から連合艦隊としての最後の出撃をしたころ、数多くの

氣を感じて歌舞伎を演ずるという氣

いほどの遺骨を戻すことができていな

い。小笠原諸島の硫黄島、サイパン、パ

ラオ、フィリピンのレイテ島など、天皇

陸上が慰靈なされた世界各地には、

高度成長に脇目も振らずに突き進ん

で行く中で他人事のように忘れ去ら

れた数えきれないほどの遺骨が眠つた

ままなのである。

「黒島を忘れない」の中には、「元特攻隊員の『まだ』の海の底にも、家族のもとに帰りたいと願つてゐる人が、何人も眠つてゐるはずです。」日本人なら、それを忘れないで揺んでほしい。

そうして、あの人たちを海の底から、故郷の家族のもとに帰してやつてほしいです」という発言が引用されてゐる。私たちが、一人一人の遺骨を拾い集めて日本に戻すことはとても難しいことではあるけれども、いまから日時

以前、この「ラムでも私がグアム島に慰靈の旅に行つた折りに感じたこと」を掲載したことがあつた。グアムに住む芳賀健介さんに連れて行つて頂いた事に対して、それぞれが住んでゐる場所から何ができるのか、1歩だけでも進むとすれば何が手の届くことなのかを考えいくことが、歴史を考えるということに繋がるのではないか。沖縄の慰靈の日があと1ヶ月少々で訪れるこの5月初旬の時期にとてもいい本に巡り会つたと思っている。